

住吉のえきつの浦に旅ねして松の葉風にめをさましつる

〔内裏名所百首冬〕建保三年十月廿四日

住吉浦

範宗

すみよしの浦にえきつのもしほ草かさねてさゆる夜半の衣手

〔源平盛衰記 三十二〕落行人々歌附忠度自淀歸謁俊成事

落行平家ノ人々或式津ノ浪枕八重鹽路ニ日ヲ經ツ、船ニ竿サス人モアリ、或ハ遠ヲ凌近ヲ分

ツ、駒ニ鞭ウツ人モアリ、中思々心々ニゾ下リ給フ、

〔書言字考節用集 十量〕攝州三津難波津、

〔八雲御抄 五所〕津

たかつとめし所なり

〔攝陽群談 六高津〕

東生郡東高津、西成郡西高津ノ兩邑ニ屬ス、難波津ノ一名也、京中ノ南門ヨリ直ニ河内國丹比邑

ニ至ル事、日本書紀ニ見略。中是ヲ以テ方角考合スベシ、

〔古事記 仁德〕大雀命坐難波之高津宮治天下也、

〔古事記傳 三十五〕高津宮は書紀に、元年云々都難波、是謂高津宮、中略難波の地形、今も北は大坂

より南へ、住吉のあたりまで、長くつゞきたる岸ありて、岸より東は高、古は此岸まで潮來り、古

島と云る處々、今はみな陸地つゞけるぞ多き、萬葉に、淺にけ、船著て、難波津は岸の上なりけむ、

るかもとよめるは、當時既く此岸までは潮來らざりしにや、故高津とは云なるべし、中略今世にかうづを、高津と書て、此大宮を其處なりと云、其神社を此

にて、此地名、うつば物語の歌にも見えたりと云なれども、かうづは、紀孝徳卷に、蝦蟇行宮とあ處る

古の高津ならむには、今も直にたかつとこそ呼べけ、れいがで、かうづとは呼む、

〔萬葉集 三雜歌〕角麻呂歌